

第 5 章 英語入学試験(担当 : pp.116-130)

- 大学での英語の入学試験については様々な問題があるが、本章では入試問題に焦点を当て、大学入試問題の問題点を洗い出し、あるべき英語入試問題の姿を議論することを目的とする。
- 英語入試問題が一般の言語テストと異なる点
  1. 社会問題の側面をもつこと  
大学入学試験は人生に影響力が大きいと、発言者が多く、たとえ妥当性を欠いていても大きな声には影響力がある。
  2. 指導要領を考慮すべきこと  
小中高の教育の基盤となる指導要領の内容を考慮すべきだが、指導要領は常に揺れ動く。
  3. 多様な大学が作成した多種の問題が一括りにして論じられること。
  4. 多様な大学の求める学生像(英語の能力)が異なる。
  5. 日本の英語教育の歴史とその成果を体現していること。  
問題作成をするのは主に日本の英語教育を受けた教員であるため。

1. 現状に至るまで

- 明治期から受験のための英語教育があった。
- 日本の英語教育・指導要領には、パーマー(オーラル・メソッド)やフリーズ(オーラルアプローチ)、CLT の影響が時代ごとに見られる。
- 指導要領に示される指導用単語数は減少を続けている。  
明治後期 : 約 11,000 語水準 → 1950 年代 : 約 6800 語 → 2006 年 : 約 2700 語
- 和文英訳・英文和訳の出題は連綿と続いている。
- 国公立の入試においては共通一次(1979 年施行)・センター試験(1990 年に改称)になどが取り入れられてきた。

2. 英語入試問題に対する認識とその評価

2.1 Ishikawa (1911) in Tanaka(2008)の提言

石川は、パーマーを補佐してオーラルメソッドを広めた英語学者。試験問題について、「問題のレベルを受験者のレベルに合わせよ」、「明確な採点基準を設けよ」「文法においては、運用能力に重点をおけ」、など、9 点の提言をしている。ほとんどの問題点が指摘されているが、当時は取り入れられなかった。

2.2 『1971 年度大学入試英語問題の検討 ―今後の改善のために』

- 将来の改善策として以下 3 点を挙げている。
  - (1) 中、高、大の一貫した英語教育をめざし、大学の入試が中高の英語教育をゆがめることのないように、改善に努力すること。
  - (2) 高校よりの調査書を重視すること。
  - (3) 外国語学習に対する適正を測定し、入学後の教育に資すること。

■ 即時改善できる 4 点

(1) Reading

文法和訳のみに偏らず、内容理解力を測定する。敏速な理解力測定のための速読テストも加える。

(2) Writing

文法英訳のみに偏らず、基礎的構成能力を測定するための出題形式を工夫する。

(3) Hearing と Speaking

音声面を重視し、hearing test, 直接に口頭で発表させる方法で努力する。

(4) 入試全般について

a.基礎的な英語学力を問う、b.現代英語のみ出題、c.語彙は高校のテキストを参照する d.主観テストは最低基準を厳格に規定、e.回答例公表に努める。

■ 2010 年時点で改善された点は、以下 3 点。

①センター試験導入による 2 段階の入試 ②ヒアリングテストの実施 ③現代の英文の使用

2.3 共通一次 — 入学者選抜の改善などこれまでの経緯(文部科学省, 1979)

■ 共通一次の導入による改善点

- ① 難問・奇問を排した良質な問題の出題
- ② 共通一次を利用する大学における二次試験で、教科が平均 5 教科から平均 2 教科に削減
- ③ 小論文、推薦、帰国子女・社会人選抜など選抜方法の多様化

2.4 Brown & Yamashita(1995, from *Language Test in Japan*)

■ 日本の大学入試英語問題について、リーディング・テキストの難易度、問題形式、問題によって測定される技能を分析し、主に以下を指摘。

- ・ リーディング長文は教科書より難しく、トピックについての知識が必要。
- ・ 受験生はテスト技術を身に着けるため予備校に行く必要がある。
- ・ コミュニカティブな授業を行っても、その後文法の入試問題を解かなければならない。
- ・ listening がないのは不自然。
- ・ テストをレビューする機関があるとよい

→ 指導要領の OC 導入は 1989 年・センターリスニング導入は 2006 年

2.5 クラーク(1996, from 「英語選択制の試み」『GENIUS・CLIPPER 英語通信』)

■ 日本の「受験英語」に関して、ことばはコミュニケーションの手段であるのに、目的から外れている、と批判。

- ① 入試は選抜のためにある、②入試問題は難しすぎる ③英語教育に影響を与えている ④日本人英語教師の発音、イントネーションは正しくない と主張。

2.6 ワトキンス,ガレス・河上道生・小林功(1997, from 『これでいいのか大学入試英語(上)』)

- ① 大学入試問題は高校の教育に影響を与える
- ② 試問題には欠陥がある、③入試問題は英語運用能力を評価できない、と批判。

■ 日本人教員から教授され、教員になった教員が受験参考書や英和辞書を基に作成した入試問題は

欠陥品であるため、ネイティブも作成に関与、多人数で作成などを主張。当時反響があった。

## 2.7 英語教育の視点から見た大学入試英語問題の問題点

- 大東(2004)は「10年間の英語学習で、まともに英語のできる日本人は少ない」と述べ、大学入試問題の責任を問いているが、問題作成・実施する日本人英語教員を生み出してきた、日本の英語教育を問題にすべきである。

## 2.8 いわゆる受験英語「構文」・「公式」の系譜

- ① 受験英語を批判する英語教育も、英文解釈法の代案を示すことができず、英語読解力の増進に貢献していないため、従来の方法を否定できない。
- ② 「構文」主義の英文解釈法の問題点が担ってきた役割は過少評価できない。構文の説明のための英文が古いものは、新しく更新すればよい。
- ③ 外国語理解の場合は、トップダウンだけではなく、ボトムアップも必要である。

## 2.9 大学入試英語問題 — 英語教育およびテスト理論の立場から

静哲人(2006)：「英語は外国語である。…日本人学習者にとっての「本番」はテストだ。…大学入試は日本という池における、英語学習食物連鎖の頂上に位置するプレデターだ。」

- ① 日本では外国語である英語を使用する場はない
- ② 日本の英語教育はテストのためにある
- ③ 大学入試が最上位であり、そのあり方が英語教育に影響する、と主張。

## 2.10 入試英語問題の批評空間を創り出す

「入学試験は言語の試験であっていいのか」という問題に関して、言語のテストに関して、学問的な素質、才能判断されなくてもよいのだろうか、という問題。

## 2.11 大学入試とリスニング

音声テストのあり方についての4つの提案(太田, 1996)

- (1) 英語の知識ではなく技能を測定すべきである。
- (2) 音声テストに全体の50%の配点をすべきである。
- (3) リスニングを他の3技能と結びつけた設問にするべきである。→listening = understanding
- (4) スピーキング能力と相関の高い技能を見つけ出す研究を進めるべきである。

## 2.12 尾崎(2008):大学入試に関する問題点

(1) テストの種類あるいは目的の不明確さ

- 大学入試の異なる側面。

- ① 高校英語教育における学習到達度を図る到達度測定テスト
- ② 大学入学後の授業における熟達度測定テスト
- ③ 定員数まで受験者数削減のための集団参照的テスト

- 入学定員数に近い数の学生の選別を目的とした基準参照的テストもあり、難関大学で難しくせざるを得ず、結果学習指導要領を逸脱してしまう。

(2) テスト細目決定の難しさ

- 学習指導要領・解説に細かい学習項が明記されておらず、高校英語教科書は多様で実用性に乏しい。

(3) 実用性の最優先

- 受験料のために多くの受験者を集めることが大切で、リスニング導入などの理想的テスト作成は、受験者数減につながる恐れがある。実用性を優先すると、妥当性を無視した作問になりがちである。

2.13 渡部良典(2010)

- ① 教育の失敗を大学入試問題のせいにしていたが、作成者が人間であって、人間的側面を忘れてはいけない。
- ② テストについて知識がないままに批判をしていたため、テストがどのような原理原則に基づくものなのか知らなければならない。
- ③ テストと言うと人は感情的になりがちであるが、理性的な判断に基づいて、人は検討できなければならない。

➔ 長い年月をかけて、やっと冷静に英語入試問題を捉えられる時期が来た。